

「J-POP」のトレンド 1960-2019 ——構造的トピックモデルによる推定——

大阪大学 氏名 小牧和哉

本発表の目的は、日本の音楽の歌詞データを用いて、歌詞におけるトピック（テーマ）のトレンド推定を計量的に行うことである。

日本の音楽（ここではこれを「J-POP」と呼ぶ）における歌詞分析は、見田（1978）の流行歌研究が代表的なものであろう。しかし、見田の研究以後の時代において、素朴な文化反映論的な目論見で以て、歌詞のみを分析対象として選定することは、視覚メディアの台頭の中で、難しいということは昔から言われ続けてきている（例えば、小川、1997）。

そのような指摘の一方で、歌詞分析が試みられてきた多くの研究は、個別事例を取り上げ、時代の転換点を指摘するような研究が多いことや、歌詞のようなテキストデータに関して、計量的に時系列的分析を行った社会学的研究は実際のところ、あまり多く見られない。また、見田（1978）を含め、計量的分析を行っている先行研究においてもトピック内容を事前に分析者が決めて行っていることや、サンプリング対象の恣意性（バイアス）があり、方法論の問題も孕んでいるものと考えられる。

本発表ではこのような現状を踏まえつつ、上記の問題点を解決する方向性を導きだすための分析手法として、構造的トピックモデル（Roberts, Stewart & Tingley, 2019）を用いた。構造的トピックモデルの特徴として、1) 目的変数となるテキストデータにおけるトピックを事前にカテゴリ化することなく、2) 共変量（covariate）を説明変数として回帰モデルに投入することが可能であり、3) 複数のトピックが各文書において確率的に分布するという自然な仮定を置くことができる点が挙げられる。

本発表ではこのトピックモデルの利点を生かしつつ、データの代表性を考慮するため、サンプリング対象として、『オリコンランキング』の各年度上位 50 曲の歌詞を主に抽出し、前処理を行った上で、分析を試みた。

分析の結果、目的変数をトピック割合、説明変数に年（1960-2019 年、連続変数）のみを投入したモデルでは、単語間の意味論的な繋がりや排他性の指標を参考にした結果、トピックが 5 つに分類されることが分かった。その他の共変量を投入したモデルでは、トピック数と内容が大きく変動した結果となった。

【引用文献】

見田宗介 (1978). 近代日本の心情の歴史—流行歌の社会心理史 講談社

小川博司 (1997). ポピュラー音楽研究の困難と課題 ポピュラー音楽研究, 1, 2-6.

Roberts, M. E., Stewart, B. M. & Tingley, S. D. (2019). stm: An R Package for Structural Topic Models. *Journal of Statistical Software*, 91(2), 1-40.